

## 「聖霊降臨」

2018年05月21日

「霊」という言葉は、旧約聖書で171回、新約聖書で「神の霊」「汚れた霊」などを含め248回、「聖霊」という言葉は、旧約聖書にはないが、新約聖書に94回、記されている。聖書は「霊」と「聖霊」に溢れている訳で、それほど、大切な言葉であるということである。ところが、「霊」と「聖霊」は分かったようで、よく分からない言葉ではないか。

まず、創世記は人間創造に関し、次のように書いている。「主なる神は、土（アダム）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。（2章7節）」人の体は土の塵でできており、神が「命の息」を吹き入れて、生きる者となった。「命の息」の「息」はヘブル語では「ルアッハー」と言い、神の「霊」である。神の「霊」を受けて、初めて生きる者となるというのが聖書の人間観で、「霊は命の根源として捉えられている。旧約聖書に登場する信仰の偉人たちは皆「霊」を受け、「霊」に導かれている。ダビデは、次期の王としてサムエルから油を注がれた時、「その日以来、主の霊が激しくダビデに降るようになった（サムエル上16章13節b）」と記している。エゼキエルは予言者として召命を受けた時、「彼がわたしに語り始めたとき、霊がわたしの中に入り、自分の足で立たせた（エゼキエル2章2節）」と告白している。

新約聖書において、マリアが主イエスを懐妊したのは「聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。（マタイ1章18節）」と記され、また、主イエスが受けた荒れ野の誘惑は、「さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、“霊”に導かれて荒れ野に行かれた（マタイ4章1節）」と書かれている。「霊」は、神と交わり、神の圧倒的な知恵と力に与る、神の側からの働きである。ところが、特別な人ではなく、全ての人に「聖霊」が注がれる出来事が起こった。それが、使徒言行録2章に記されているペンテコステの「聖霊降臨」である。今年、昨日が「聖霊降臨日」であった。弟子たちは、主イエスは十字架で殺されたけれども復活し、生きておられると知って喜んでしたが、その意味をまだ理解していなかった。弟子たちが集まっていると、突然、天から激しい風が吹いて来るような音が家中に響いた。そして、炎のような舌が現れ、一人一人の上に留まった。聖霊が降ったのである。すると、弟子たちは聖霊に押し出され、神の偉大な業を語り出した。その場には、他国から来た人々もいたが、皆、弟子たちの語る言葉を自分の故郷の言葉を聞くように理解した。これは、パウロがコリント書（一）12章3節で「神の霊によって語る人は、だれも『イエスは神から見捨てられよ』とは言わないし、また、聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』とは言えないのです」と書いているように、聖霊によって、イエスは「主」とあると信じ、告白したのである。イエスを「主」と信じ、告白した時、自分たちは地にある同等の人間であることを知り、互いを受け入れ合った。この奇跡が心と言葉の通じ合える教会を生み出したのである。聖霊降臨は、主イエスを信じる信仰を同じくする教会の誕生であった。「霊」は「助け主」「弁護者」「真理の霊」として、主イエスに倣い、愛に生きる力として働き、教会を主導した。

「霊」は、他とは異なる聖なるものとされ「聖霊」と言われた。後の教会は、「聖霊」を「御父」と「御子」との三位一体のダイナミズムの神として捉えた。「聖霊」は宗教的感情、情緒で受け入れるのではない。主イエスへの信仰を深めさせ、時代の不条理な罪を悲しみながらも、十字架によって乗り越えられている恵みの現実を示してくださる。神は天におられ、主イエスは、その右に座しておられる。私たちは「聖霊の時代」の日々を、終わりの日を望んで、喜びの中、聖霊の導きに生かされているのである。